

## ふるさとごぼれ話 37

### 大田南畝なんぼと遠藤権兵衛

大田南畝は、蜀山人しゆく山人や四方赤良しほうあかりなどの号で狂歌師や戯作者げさくとして活躍した江戸時代後期の文人ですが、本来は幕臣で、通称を直次郎といました。文化6年(1809)正月から3月にかけて、南畝は勘定奉行所の役人として、多摩川・浅川沿岸の堤川除御普請つみかわよけごしん(幕府が行う堤防工事)の検分のため、多摩地域へ出張しました。この時のことを、南畝は「調布日記」に書き残しています。

六十一歳の南畝は、正月2日に日野本郷の玉屋栄蔵方に泊まり、いったん八王子方面へ向かった後、5日に豊田村の名主権兵衛宅に泊まりました。南畝は、豊田村の領主である大久保矢九郎の父が「藤の満丸」の名で狂歌をやっていたのを、「昔知れる人」と書いています。南畝は翌6日、若宮明神に参詣してから上田、万願寺、新井村訪ねました。そして2月16日にも再び豊田の権兵衛宅に泊まりました。

遠藤権兵衛は、名主としての功績を認められて、大久保家から苗字帯刀を許された人物です。隠居した後も幕府の御普請の際に役人を泊めて、大久保家から褒美を与えられています。

